



図3 小白山観測所 (五藤隆一郎氏提供)



図4 シンポジウム出席者

and Engineering Foundation) の事務総長など、多数の関係者が出席され盛会であった。

29日は小白山での観測所開所式に参列するため早朝起床、関係者・報道陣らと共に特別したのバスでソウルを7時に出発した。美しいハイウェイで韓国の農村地帯をつつぱしり約5時間かかって山麓に到着、そこからはジープに分乗し、まだデコボコの道をゆっくり運転で約30分かかって山頂に到着した。午後2時から式典、Minn 台長と韓国お役人の祝辞につづいて、日本からの参加者を代表して筆者もお祝いを述べた。現在ある主望遠鏡は米国 Boller and Chivens 社製の 60 cm 反射 (主として光電側光用) と五藤光学社製の 20 cm 屈折 (ファブリー・ペロー干渉フィルターをつけて太陽の $H\alpha$ 観測など) であるが、立派なメッキ装置やアイリスフオートメーターなどの新しい附属品も整っており、さらに次の計画もいろいろあるとうかがった。

この小白山観測所の敷地決定にあたっては、6年前に石田五郎氏がコンサルタントとして韓国を訪問され、11日間にわたり韓国建設委員会の方々と共に徒歩で検分され、いろいろ助言を与えられたことが大きな貢献となっている (天文月報 65 巻 8 号 203 頁, 1972)。年間を通じて晴天日数 200 日以上というデータが示すように、この小白山観測所は測光観測などには恰好な場所と言っ

てよからう。

午後5時出発、同じ道を再びバスでつ走り、深夜ソウルに帰着したが、別れぎわに天文委員の一人でもあった延世大学の李鉄柱教授 (物理学者) が謙虚に言われた言葉「この天文台ができたのは韓国では新羅^{シラゴ}以来のことで、われわれにとっては大事業でした。これで天文観測の分野で少しでも国際的にご協力できるのは韓国学者の大きな喜びです」に、筆者は胸に熱いものを感じた。

国立天文台以外にも延世大学がソウル郊外に 60 cm 反射 (五藤光学製) をすえつけ、測光観測を始める予定である。今後韓国の天文学は、国立天文台を中心にソウル大学、延世大学などが協力する形で発展してゆくことであろう。隣国に新生した近代的天文学研究のグローブールが、今後着実に発展しそだってゆかれることを心に念じながら、あわただしく過ぎた短い韓国訪問を終え、9月30日朝金甫空港から帰国の途についた。

今回のわれわれ日本からの参加については日本学術振興会が日本側のスポンサーであり、近く学術振興会と KOSEF との間で、長期にわたる一般学術交流に関する正式とりきめが調印される予定と聞いている。

雑報 1

銀河の自転速度曲線

面輝度の明るい Sa-Sb 型銀河 10 個の自転速度曲線を、キット・ピークとセロ・トロロの各 4 m 望遠鏡の分光器にイメージ・チューブを付けて観測していたルーヴィンのグループが、その解析結果を発表した (Ap. J., 225, L 107, 1978)。彼女らの観測は従来の観測に比べて波長分解能が 25 \AA mm^{-1} と良く、速度が $\pm 8 \text{ km sec}^{-1}$ の精度で求まっている。また観測範囲が銀河の周辺部近くにまで及んでいるという点でも画期的である。重要な結果は次の二点である。

(1) 自転速度は一般にかなり遠方まで概ね一定である。これは、自転速度最大半径が存在しその外側では自転速度は減少するという従来の描像とはかなり異なる結果である。著者自身が指摘しているように、このような遠方まで平らな自転速度曲線は円盤状銀河モデルでも球対称銀河モデルでも再現可能なので、この観測結果から直ちに、見えない大質量ハローが銀河を取り巻いていると結論するのは乱暴であるが、これは大質量ハロー存在説には不利でない観測事実と言えよう。

(2) 自転速度は渦状腕の内縁部では外縁部に比べて約 20 km sec^{-1} 小さい。この結果は密度波理論や銀河衝撃波理論の予言と矛盾しない。

女史は昨年9月来日論文の講演をされた。 $H\alpha$ 線が S の字を引き伸ばしたような形に見事に湾曲したスペクトルに感銘を受けたのは私だけではないと思う。今後のこの種の観測が楽しみである。 (家 正則)